

[成果情報名]ブドウの害虫クビアカスカシバの加害生態

[要約]クビアカスカシバの被害は、「ピオーネ」、「巨峰」で多く、産卵・幼虫食入は、複数年に渡って同じ部位に集中する。雌成虫の産卵数は700卵程度認められ、卵期間は11～12日間であり、ふ化幼虫は直ちに食入する。

[担当]果樹試・環境部・病害虫科・内田一秀

[分類]技術・参考

[背景・ねらい]

近年、ブドウでは枝幹害虫のクビアカスカシバの被害が問題となっている。成虫は6～8月に発生し、発生盛期は6月中旬～7月中旬であるが（H20年度成果情報）、加害に関する生態は明らかとなっていない。そこで、被害状況や産卵・ふ化行動を把握し、被害防止対策の基礎資料を得る。

[成果の内容・特徴]

- 1．県内の本虫による被害は、「ピオーネ」や「巨峰」が多い（図1、2）。
- 2．ブドウ樹上の同じ部位に、複数年に渡って、産卵やふ化幼虫の食入が集中する（表1）。
- 3．雌成虫の産卵数は、10日間前後で700卵程度認められる（表2）。
- 4．卵期間は、6月中下旬（日平均気温22.6～24.4℃）の屋外条件で、11～12日間である（表3）。
- 5．ふ化幼虫は、ふ化1日後には樹体内へ食入する（表4）。

[成果の活用上の留意点]

- 1．特に被害が発生しやすい品種では、幼虫の食入による虫糞やヤニの噴出に注意して、初期被害の発見に努める。
- 2．過去、被害に遭ったブドウ樹は、同じ部位に再び被害が発生しやすいので、防除と被害の観察を重点的に実施する。

[期待される効果]

- 1．産卵習性やふ化幼虫の食入行動などの加害実態を知ることによって、防除の効率化が図られる。

[具体的データ]

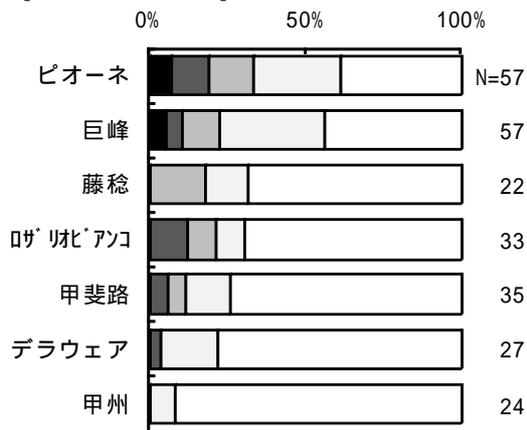


図1 品種別被害状況(2010年)

方法：県内76名の生産者によるアンケート

- 甚：樹の枯死等の重大な影響あり
- 多：生育・収量へ大きな影響あり
- 中：生育・収量へ軽微な影響あり
- 少：被害はあるが生育・収量などへの影響なし
- 無：被害なし

表1 ブドウ樹上の各部位における産卵数と幼虫の食入痕数の推移(2010~2011年)

調査部位 No. ^{z)}	産卵数(個)		食入痕数(箇所)	
	2010年	2011年	2010年	2011年
1	27	33	18	16
2	16	1	10	0
3	13	1	16	5
4	12	3	5	2
5	14	45	13	19
6	0	0	0	0
7	0	0	0	0
8	0	0	0	0

方法：巨峰(短梢)を供試し、2ヶ年にわたり同一樹の同一範囲(主枝上の長さ約30cmの範囲)における産卵数と食入痕数を調査

調査日：2010年7月20日、2011年7月11日

z) No.1~5は、2010年に被害が認められた部位
No.6~8は被害が無かった部位

表2 産卵数とふ化状況

個体No.	調査年	産卵数(個)	ふ化率(%)	生存期間(日)
1	2011	627	83.5	9
2	2012	708	91.2	9
3	2013	752	89.5	12

表3 屋外条件における卵期間(2011年)

産卵日	産卵数	ふ化数	平均卵期間(日)	平均気温(産卵日~ふ化日・)
6月15日	7	6	12.0	22.6
6月18日	1	1	11.0	24.4

方法：ブドウほ場に設置した網室内に雌雄成虫を放飼し、ブドウ樹上に産みつけられた卵を経時的に観察した。

表4 新梢へのふ化幼虫の食入行動(2011年)

反復	接種頭数	接種後の経過日数	食入痕数(個)
	34頭	1日後	22
		4日後	32
	41頭	1日後	19
		4日後	25

方法：室内において、ふ化直後の幼虫を新梢へ接種し、食入痕数を調査した。



図2 幼虫および被害部(幼虫は体長4cm程度まで発育)

[その他]

研究課題名：ブドウの害虫クビアカスカシバの防除対策

予算区分：県単(重点化)

研究期間：2011~2013年度

研究担当者：内田一秀、村上芳照、綿打享子、功刀幸博